

親鸞における仏道観

——『大経』五悪段の教説をてがかりとして——

中川皓三郎

他者と較べる

——社会的比較過程の理論と慢——

蜂屋良彦

本号に論文掲載

社会生活を営む際、自分のもつ特徴についての適切な知識をもつことは、円滑な社会的相互作用を促進するうえで極めて重要なことである。自分の持つ資質や業績あるいは自分の置かれている状況について判断しようとするとき、人は通常二つの物差しを用いる。物理的物差し (physical reality に基づく判断) と社会的物差し (social reality に基づく判断) とである。身長や体重のように物理的に計測可能なものであっても、それがその個人にとって持つ意味は、他の人たとえば友人との比較を通じて出てくるように、最終的な評価は社会的物差しによって決まることが多い。客観的な判断基準を欠く資質や業績や状況についての判断や評価においては尚更のことである。

このように自分と他者を比較し自己定位を図ることを、社会心理学では社会的比較 (social comparison) という

が、この判断過程を検討して、フェスティンガー (Festinger, L. 1954) は「社会的比較過程の理論」(A theory of social comparison processes) を発表し、その後の多くの研究者に刺激を与えたことになった。この理論の基本的な前提は次の通りである。①人には自分の意見や能力を適切に評価しようという動因がある。②人は直接的物理的手段が利用できないときには、他者の意見や能力と比較することによって、自己の位置づけを図る。③人は類似した他者との比較を試みやすい。

しかし、この第3番目の前提については、さらに検討される必要がある。社会的比較の対象としてどのような他者を選ばれるのかと言うことは、結果としての自己評価を大きく左右する重要な点である。基本的には、上記のように自分と類似した能力や意見をもつ他者を選ばれやすいとされているが、それほど単純ではないように思われる。

単に自分と類似した他者を比較対象として選ぶというのではなく、時に応じて自分より優れた他者あるいは劣った他者を選ぶものと考えた方がよさそうである。一般的に言って、今日のような過度の競争社会にあつては、人はだれしも自己評価を維持し、さらにこれを高めたいという強い欲求を持つようになる。この自己評価は自分と他者との比

較によって決定されるところが大きい。自己評価を高めるのには、自分と他者との比較に関して方向を異にする二つの道がある。その一つは、自分よりやや優れた他者をライバルと見なし、これに刺激されることによって、自ら大いに努力しより高い知識や技能を身につけ業績をあげるといふ、いわゆる上方に向けての社会的比較 (upward comparison) である。過度の競争に陥らない限り、このことは社会生活のうえで好ましいことと思われる。このような上方に向けての社会的比較が生じやすいのは、その個人に自分を向上させようという動機づけが強く、かつ、個人の内的条件および外的条件を考慮して、その個人の能力発揮の可能性が高いと本人自身に受けとめられている場合に限られる。

しかし、厳しい外的状況の下で個人は少々の努力によっては容易に解消できないような欲求不満や不幸や絶望感に襲われることがしばしばある。かかる状況では、個人の主観的幸福感減少し自己評価は低められてしまう。このとき個人が自己評価を維持しあるいは高めるために取り得る別の方法は、下方に向けての社会的比較 (downward comparison) なのである。この下方比較過程は、いじめ現象にも深く関わる心的メカニズムの一つと思われる。

この点に關しての理論化の一例として、ウィルス (Wills, T. A. 1981) の下方比較の理論をあげることができ。その要旨は次の通りである。(1) 基本原理…人は自分よりも不幸な他者との比較を通じて、主観的幸福感を増大させることができる。この下方比較は、主観的幸福感の急激な減少が生じたときに発生しやすい。(2) 2種の下方比較…下方比較には受動的なものと能動的なものがあり、受動的なものとは、自分の身の周りにいる不幸な他者を見つけてこの人を自分との比較の対象として利用するものである。これに対して能動的なものは、他者を積極的に傷つけることによって自己と他者との心理的距離を一層拡大し、自分と他者とを比較しようとするものである。(3) 下方比較の主体…自己評価を傷つけられ、これの回復の見込みの無い状況に負い込まれた人ほど下方比較を行いやすい。(4) 下方比較のターゲット…下方比較のターゲットとされやすい他者は、社会的に弱い立場の者が選ばれやすい。人々は攻撃の対象として「安全」な対象をターゲットとして選ぶ傾向がある。(5) 攻撃者の複雑な気持ち…下方比較を行う人々は、より不幸な他者との比較を心底より好ましいとみなしているのではなく、複雑な気持ちを持ってこれにのぞんでいる。すなわち、人々は他者の上に生起する不幸を常に歓

迎しているというのではなく、もし他者を好意的にみることを通じて自己実現がはかれる機会が与えられる場合には、そのような機会の方をむしろ好んで利用したいと願っている。

これらの理論に共通しているところは、自他の対比を通じて自己評価を維持し高揚しようとする点である。しかし、これとは反対に自他の同一視を通じて自己評価を維持高揚しようとすることもある。すなわち、自己評価を維持高揚できるような他者を探し出して、その他者と自己とを同一視しようとすることである。これは反映過程あるいは威光過程といわれる (comparison process に対して reflection process といわれる) もので、他者の優秀な業績をわがこのように受けとめて自己評価を高めることであり、チャルディーニら (Cialdini, R. B. et al. 1976) のいう栄光浴 (basking in reflected glory) 現象などがこれにあたる。

以上のように、対比と同一視という一見相反するようにも思われる二つの過程が、自己評価の維持向上と言う目的のために、同一の個人の中で巧みに切り替えられて展開されることを理論的經驗的に検討しようとしたテッサー (Tesser, A. 1988) の自己評価維持モデル (self-evaluation maintenance model) が注目される。この切り

替えを規定する要因として、自他の心理的距離 (closeness)、課題や活動が自己定義に関連している度合い (自己関連性 relevance) があげられている。例えば、一人の物理学者がいるとしよう。その友人が芸術家で (high closeness + low relevance)、すばらしい業績をあげたとき、その業績を正当にあるいは過大に評価しやすい。これは同一視による自己評価の向上の試みといえる。ところが、その友人がやはり物理学者で (high closeness + high relevance)、すばらしい業績をあげたとき、その業績を過小に評価しがちである。これは対比による自己評価の低下を防ぐためである。

以上、社会心理学の領域での対人比較の研究の一端に触れたが、仏教でこの問題に関わりが深いものとして慢という考え方があり、ここから多くのことを学ぶことができるように思われる。俱舍論では七慢あるいは九慢があるとしている。広説仏教語大辞典(中村元著)によると「おのれは他人よりもすぐれていると妄想して、他人に対して誇りたがる心のおごりである。……七慢とは次の七つをいう。(1)慢。自分より劣った者に対してはすぐれたと自負し、同等な者には同等であると高ぶる。(2)過慢。同等の者に対してはすぐれていると、すぐれた者には同等であるとする。

(3)慢過慢。すぐれた者に対し、逆に自分がすぐれているとする。(4)我慢。自分の身心を永遠不変の我であるとのむ。(5)増上慢。さとりを得ないのに得たとする。(6)卑慢。多くすぐれた者より少し劣っているにすぎぬとする。(7)邪慢。徳がないのにあるとする。」これらのうち、慢、過慢、慢過慢、卑慢の4つは自他を区別し、常に自己の優位性を保っておきたいという心の働きであり、対人的慢と言える。

これらの慢はいかにして発生し得るのか。このことに関して、文献に沿っての検討を進めなければならないが、ここではその心的メカニズムを、いま仮に私流に推察しておきたい。自分のもつ特徴をいくつかの低位次元に分け、他者よりも劣る低位次元を過小視し、他者よりも優れる低位次元を過大視することを通じて、過慢あるいは慢過慢が生じると考えることはそれほど不自然なことではないだろう。欧米の社会心理学の文献では、慢過慢に類する社会的比較に関しては言及されていることはないようであるが、日常生活を細かに観察してみると、このような比較がしばしば行われている。慢過慢はまさに慢中の慢とも言えるものであろうし、社会心理学者は、長く深い歴史をもつ仏教から多くを学ばねばならないことを示す一例である。

参考文献

- Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S. and Sloan, L. R. 1976 Basking in reflected glory: three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 366-74.
- 中村元著『広説佛敎語大辞典』一五七一頁、二〇〇一年、東京書籍
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Tesser, A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Admness in Experimental Social Psychology*, **21**, San Diego, California: Academic Press.
- Wills, T. A. 1981 Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.